

内田 麻理香 評

伴侶種宣言——犬と人の「重要な他者性」

ダナ・ハラウエイ著(以文社・2520円)

古今東西、多くの論客が愛について語ってきた。しかし、人間はいまだに恋人や夫婦間でのみ、親子間でも許し合いを起すこともある愚かな種だ。

著者は「サイボーグ宣言」(『猿と女とサイボーグ』に収録)などで知られるフェミニズム研究者である。彼女のフェミニズム研究は、ときには猿を使い、時にはサイボーグを持ち出すという手法で、重厚な理論を積み上げてきた。

実際、「サイボーグ宣言」は、読む者に威圧感を与える難解な文書である。一方、今回紹介する『伴侶種宣言』はまったく趣が異なる。身構えて挑むと、拍子抜けするくらい穏やかさに満ちあふれている。何しろ、愛犬家である著者が「嬉々として犬にかまけ」て書いた書物だ。今回は犬という存在を使って、フェミニズムを論ずるのだが、フェミニズムの要素が背面に押しやられたように見える。二〇〇ページにも満たない文章で、単に犬とかまけていると見せかける。

しかし、そうではない。読み込むほど、フェミニズム、そして他者との関係に対する示唆に富んでいることがよくわかる。副題にある「重要な他者性」という言葉が頻りに登場する。注釈にもある通り、単なる「重要な他者」ではなく、「重要な他者性」という言葉を選ぶ著者には明確な意図がある。「かけ

「愛する他者」との望ましい関係とは

がえないパートナーであることと、それにもかかわらず互いに無視できない他者性を有していること」の両方を含意している。あなたが「大事な相手」と思っている人(動物かも人工物かもしれない)が、他者であることは忘れてはならない。

そして、著者は「大事な相手」を安易に同一視しない。犬と人間が別種であるという彼女の固い意思は本書に徹底している。「哺乳類階級制度における社会的平等という幻影もない」と断言し、「わたしが犬の『ママ』と呼ばれるのが耐えられない」と述べる。後者の言及は、犬としてある種に対して失礼だと著者は考えるからだ。

大切な他者を易々と自己同一視することに抵抗する透徹した視点。確かに、パートナーとなる他者を「私の理解者」、下手をするとそれを超えて「私と同じ」と考えてしまうことがある。この危険な考えの道筋は安直であり、他者を軽んじる一歩になるだろう。

著者によれば、人と犬が対等な関係を持ち、愛を育むためにはトレーニングが必要であり、その愛を発展させるのは各種レースであるという。犬のレースは一見、人が犬を従属させるゲームであるように思えるかもしれない。しかし、人が犬の能力を発揮させる場であり、その犬の姿に惚れ惚れしてさらに愛を深める関係を生む形である

と考える。

「どうしたら現実世界のアクターたちが少しでも非暴力的なかたちで相互に説明責任を果たし、愛しあうことができるのか」という点が、本書におけるフェミニストの著者の目標である。彼女が探究してきた緻密な理論の結果がここにある。

私たちは愛に対して過大な期待を抱きもするし、絶望もする。しかし、著者はそこにフェミニズム研究者からの希望を与え

る。それぞれの特異性を重要視し、その特異性に対する尊敬や敬意が重要なだと説く。

「重要な他者」に対しては、思い入れのせいか「他者性」を忘れてしまう。「父権的」に相手を支配することもない。「母性」でもって相手を呑み込むのではない。他者性という視点があれば、適切な愛の形を結ぶことができるかもしれない。将来たどるべきかもしれない麗しい愛の姿を垣間見た。(永野文香訳)